

例会 作品 帳

◎平成二十六年十一月十五日(第二十一回)

(佐藤 亮照)

差し入れし我が手に揃う晩秋や小川の冷たさ井戸の温もり
同年の友を重ねて送りたるいつの間にもやら我が身年降る
本堂の寒さ静けさ厳かさもみじ茶会の賑わい何処

(黒沼 貞志)

診察の待合室に翁居て天眼鏡で新聞見入る
かなかなの途切れし声にかなかなと遠くに聴こゆかなかなの声
この地にも都会の姿忍び寄りチラシに目立つ小さきお家

夏の夜の花火大会懐かしき時も流れて棧敷席有り

世の中に名もなき草は無いと云う路肩に蔓延るあまた草あり

朝まだき日課となりし窓開くる明けの空にはスーパームーン

秋歩み橙色の花一輪主が去りし家の庭先

十年の歩みを話す機会得て浮かび上がりしマイライフワーク

銀意草露けし枯葉押し分けて旅人癒す山の辺の道

ブナの木の本漏れ日の中佇めば山の秋風顔を撫でて行く

大岩と雪との間にはくま裁星霜まるで蛸足強き枝木は

錦鯉古刹の池に棲みついて水藻の陰で尾びれ隠さず

若者が群れる松島瑞巖寺雑誌翳してGLAYと伴に

(千葉 克明)

エンディング準備している友ありて急な入院今悔やまれる

下血をば吐血と聞いた友もあり生死にかかわる噂となりぬ

高層の窓から見える街の顔時と共に変わりゆくかな

御嶽の噴火に散った人は皆働き盛り国の損失

朝日浴び畑に通う上り道生きる喜び満ちて来るなり

歌に触れる

遊縁の衆(人生を数倍楽しむ会)

朝日浴び畑に通う道すがら太陽拝むインカを想ふ

(寺崎 秀也)

秋の空一期一会のおもてなしもみじ彩る茶の湯の会

おごそかに和讃・詠歌にオカリナと音色奏でる霜月の寺